

「ゴルディアン」 Gordian by Steve Savile

時空間の裂け目の嵐の周りで、天空は激しく荒れ狂った。球電光がその中心から波打って現れ、打撲傷のような青紫色の渦巻がパチパチと音を立て、マーメイドキーの屋根々々をくすぶらせた。雷がバリバリと音を立て、建物を基礎から揺るがせた。聖書の創世記を思わせる空の下、カーディフ市内の礎石ですらがたついた。

白い光のアーチが夜空を切り裂き、古いノルウェイ教会の屋根の銅の避雷針に落ちた。その音が無人の通りをこだまする。近辺のいつもの生活のどよめきは、夜のベッドの中にたくし込まれ、しまい込まれていた。昨日のニュースでは下水が詰まっていた、雨が道路にあふれ、窓枠ががたがたと音を立てた。

一匹のねずみが慌てふためいて通りを横切っていたが、途中で足を止めた。もはや、そいつが道の端まで行きつくことは無かった。

孤独なトラベラーが嵐の黒い中心から歩み出てきた。彼が歩くと黒い空が波打つかのようになり、奇妙に優雅に動いた。背は高く、理由をはっきりしないが、非常に、まるで憔悴きったかのようにすらっとしていた。通りにただひとり。一瞬立ち止まると、まるで雨を味わうかのように顔を上にかしげた。そして、正面に向き直ると、わずかに左に傾け、耳を澄ませた。彼はつば広帽をかぶり、帽子で顔が隠れていた。ロングコートが脚の周りで、怒れるイヌのごとく激しくはためいた。嵐が彼の周りで荒れ狂ったが、力の作用で、激流のような雨は一滴たりとも彼にかからなかった。

ねずみに手を差しのべながら、彼はひざまずいた。生き物に近づいておいでと誘惑するように、歯と唇で奇妙なさえずるような音を立てた。相手は動かなかった。

雨が降りしきり、アスファルトに叩きつけられ跳ね返る。激しい雷雨の荒涼とした光の下、まるで肌が骨から溶けて離れていくかのように、トラベラーの手がゆっくりと形と外見を失っていく。指を開くと、影のように実態が無くなり、不可能なまでに広がった。嵐のごとく輝く肌の下には、何も無かった。深い暗闇だけだった。しかし、その暗闇の中には、命がひしめいていた。

衝撃的な素早さで動き、トラベラーはねずみをさっとなつかみ、目の前に持ち上げた。しばし、生き物を見つめる。手を構成する物質が、そのもがくからだを包み込み、ねずみを分解していく。毛皮を、肉を、骨を、そして苦痛に激しく打つ心臓の鼓動が沈黙し、無になる。生き物の苦しみが、嵐の下、消えてなくなる。

トラベラーは立ち上がった。手を構成する物質が、もう一度新形態を取る。再び歩き始めると、長く伸びる影が後ろでのたくり、もだえた。暗闇の中を歩く姿は、夜そのもののようだった。

ハブの中、イアントはグエンの肩越しに、彼女の机の周りに並べられたモニターのひとつをのぞき込み、指差した。「おっと、これは良くないです。」彼はいった。

くだんの画面には、街の公共施設の概略が多色配線図で表示されていた。そこにはあらゆるものが、全国電力系統網の電力制御装置に、中継施設だけでなく、ガス、水道が網羅されていた。街のライフラインが、画面上に表示されていた。クモの巣状の緑の線は、カーディフの通りに埋め込まれた電線を示していた。指が画面に触れた瞬間、その真下の3本の交差した線が消えた。指を離すと、さらに数センチが黒くなった。まるで連鎖反応のようだった。ひとつ、またひとつと、街中の電力が切れていく。「ぼくは何もしてません。」

「ジャック！来て。これを見て！」グエンが叫ぶ間に、頭上の照明が瞬いて消えた。バックアップ用の発電機が起動し、非常灯が点くまでの数秒間、彼らは暗闇に包まれた。その数秒の間に、モニター上の半数の線が消えていた。

「どうした？」螺旋階段を数段ずつ飛ばして降りながらジャックはいった。

「街中の電気が落ちてる。」

「停電か？」

彼女は首を振り、消灯の中心部マーメイドキーの監視カメラ映像を呼び出した。「違うみたい。碁盤の目状に、全区画が消えているって、みたいな感じ。」彼女は地点を示す位置で指を鳴らした。「中心位置からパルスが広がっていったような状態。」

「電磁パルスか？」

「ありえません。」イアントはいった。「これは送電線から情報を取得していて、機器からではありませんから。」

グエンはベイ地区のカメラ映像をじっと見た。何も見えない。闇が見えるだけだった。そこに何があるのか、特定することはできなかった。彼女は他の監視カメラを、さらに別の呼び出した。両方とも同じだった。さらに2台、マーメイドキーを異なる角度で映しているカメラを呼ぶ。海が見える側は、月とその光がなまめかしく海面に輝いて映える映像が入り、そして、すべてあるべきものがある場所には、漆黒の壁があった。何も無い場所を見つめているという事実気付くまでに、グエンはしばらく掛った。レストランや銀行、バーのあるショッピングセンターが、あるべき場所に無い。

「これは何でしょう？」イアントは再び指差し、たずねた。今度は画面を触らなかった。グエンは瞬時に質問の意味を理解した。男らしき姿が、両腕を激しく回していた。嵐がその周りに吹き荒れていた。映像のホワイトノイズが激しくなり、切れた。彼女はとっさに別の監視カメラに切り替えた。そちらの映像は、前のよりもほんの少し長く持ちこたえた。その人影から気味の悪い空気の渦が巻き起こっているかのように見える映像を、そして、どういうわけか、その渦が路肩に停まっている車の列に達し、見る間に車が分解していくのを目にできる時間分だけは。車が溶解して、金属のフレームが曲がり、ねじれて、メデューサの髪がのたくるかのように、ねじれた金属がひとりでに折りたたまれていく。そして、車は消え、次のV8エンジン車が分解し始めた。

監視カメラはポールの上でねじれ、激しい勢いでレンズの方向が変わり、ハブのモニターに大嵐の空が映った。明らかに車と同じ運命をたどったと思われる甲高いフィードバック

ク音が入り、監視カメラは死んだ。そして、モニターの映像が真っ暗になった。

表は嵐が吹き荒れ、水に洗われた通りの屋根の上で電気がパチパチと音を立てた。グエンが映像で見かけた男は、ベイ地区から周辺住宅地、そして街の中心街へとゆっくりと移動していた。

彼の影は生きていて、時折周囲を取り込むために立ち止まったときにも、くねくねと渦巻き、ねじ曲がった。それが降りかかってくると、そこから底知れない暗闇が広がり、暗闇に触れたものは消滅し、地面すら食われ、さらに広がっていく。

正面の家のひとつから漏れ聞こえてくる音に、彼は立ち止まった。その窓の向こうで、嵐のために眠れずにいるチェロ弾きが、悲しみ溢れる音色を奏でていた。トラベラーは、腕を大きく広げ、頭をのけぞらせ、風に向かって咆哮し、その声が不気味な響きで音とハモった。

通り沿いの電灯が焼き切れ、電球が砕け、ガラスがシャワーのように降り注いだ。ガラス片は、一片たりとも路上に落ちなかった。すべて消滅した。男の影が食い尽くしたのだった。

彼が空に向かって手を伸ばすと、全身が少しピンボケのようにぼやけたようだった。虹色のスパークが、どっしりとした冴えない生地のコートから滝のように流れ落ちた。体がパチパチと音を立て、如何にも危険なエネルギーでいっぱいになり、影が建物の壁を登っていく。影は石を食い尽くし、建物は崩れ落ちる間もなく溶け、後には何も残らない。目に見えるものは何も無い。下から食い尽くされていくにつれ、チェロの音色は完全な沈黙に取って代わられた。家々はその土台に向かって溶け落ちていき、その土台は岩盤に向かって、岩盤は計り知れない暗闇へと溶けていく。

そして、彼はただひたすら歩き続けた。彼が通った跡は、世界が創造される前の世界に戻った。

ジャック、グエン、イアントはお互い目を見合わせた。電力供給表示が急速に消滅していくモニターから、街中の監視カメラが死に絶えて空電の吹雪が吹き荒れるモニターへと目を走らせる。1分も経たないうちに、多色配線図から緑の線がすべて消え失せた。ハブの外の街中は、完全に電力が断たれた状態になってしまった。

「世界中、次々と灯りが焼き切れてしまったわけだ。」まじめくさって、ジャックは言った。その声はおとぎ話のうろ覚えの断片のように響いたが、彼は何も映っていないモニターを見つめ続け、その言葉の意味合いを十分に承知していた。彼は前に身を乗り出し、机に手をつくすと、口の中で舌打ちを始めた。しばらくの間、モニターのホワイトノイズをただ見つめ続け、ひとり物思いにふけた。そして、机を押しやるように身を起こした。掛けてあった灰色のウールのRAFのコートをつかむと、ガントリーに続く金属の手すりに放り投げ、意味ありげに肩をすくめた。

「行くぞ、みんな。」彼はいった。「世界を救いに。」

「待って下さい、ジャック。」イアントはいった。「外で何が起きているのかわかってるんですか？」

「いやな想像はついている。」ベイ地区の中心に出る透明リフトのプラットフォームに乗りながら、ジャックはいった。「間違いであってくれと、神に祈っているところだ。」

「一瞬だけ待って。」携帯電話をつかみながら、グエンはいった。「リースに確認を入れたいから。彼なら何が起きているのかわかってると思う。」彼女は電波が入っているのを見て安心したが、リースにかけたとたん、録音メッセージが流れた。「あなたがお掛けになった番号は、現在繋がりません。お切りになって、しばらくしてからもう一度お掛け直してください。」回線が死んでいる。彼女はジャックのほうを見た。

「だからといって、彼に何かあったとは限らない。」ジャックはいった。「街全体の電力が切れている。結論に飛びつくんじゃない。彼は無事だ。」

いうのは簡単なことだ。彼女は証拠がほしかった。彼女の心を読んだかのように、ジャックは首を振った。

「リースはおとなだ。」彼はいった。「おれには君がここで必要だ。もっと正確に言うと、おれには君がその外で必要だ。」

リフトで通りの高さまで運びあげられると、雨と暗闇の中、ジャック、グエン、イアントは周りを見ようと精いっぱい努力した。閃光が走るたび、数百メートル先のマーメイドキー方向に目が引き寄せられた。光が何も照らし出さず、実は照らし出す物が何も無くなっていることにグエンは気づき、気分が悪くなった。濡れた歩道に光が反射したり、近くのベンチや棧橋の繫船柱がきらきらと光る代わりに、光はただ無の中に消えるのみだった。文字通り、無の中に。

「いったい、どうなってるの、ジャック？」恐怖が声に出ないよう押し殺して、彼女はいった。

「勘弁してくれ、地面が動いてる。」足元すぐの傍に懐中電灯を向けながら、イアントはいった。「生きてる。」

「逃げろ。」ジャックはシンプルにいった。まだ物の外観や形態が残っている方向へと懐中電灯を向ける。逃げるうちにも、つい先ほどまで彼らがいた場所を波打つ暗がりが浸食し、一瞬前まで下にハブがあることを示していた明かりも、暗闇に飲み込まれた。

「見ましたか？」一瞬だけ後ろを照らし、恐怖に息を詰まらせながらイアントはいった。

「止まるな。」吹き降りの雨の中、SUVに向かいながら、ジャックは怒鳴った。「あいつの反対側から近づく。」

トーチウッドSUVが道路を横滑りする。街の中心部で停まろうとしたら、タイヤがスリップしたのだった。ジャックが運転し、存在なくなってしまったベイ地区から回り込

んで、ハブから見かけた孤立した姿に向かって戻っていった。SUVのセンサーでは彼を検知できず、ただ存在しないと出た。彼を先頭に、後ろに向かって空虚が扇状に広がっていく。

まず、ジャックが車から飛び出し、走って行った。コートの裾が羽のようにはためいた。雨で滑りやすくなっているアスファルトの上の水たまりをはね上げながら、グエンとイアントが3歩遅れてついていった。道路の真ん中でコソ泥を脅すために備え付けられたカカシのように身じろぎもせず立ち尽くす男に向かって、まっすぐ走っていく。その男の後ろには、漆黒の壁しか存在しない。

嵐が吹き荒れているというのに、雨がこの男に一滴も触れることなく降っていることにグエンは気付いた。いや、その表現は正確ではない。体が存在しないかのように、雨が彼の体を通過しているのだった。彼の足元の地面が何だか変だった。ベイ地区と同じく、アスファルトがめくれ上がり、足元でしぼんでいく。

「ジャック！」グエンはいった。「地面を見て！」

「わかってる。」ジャックは平然といった。

2人の横で、イアントはコートから小型の有機スキャナーを取り出した。正面をスキャンしたが、結果は無だった。装置を振り、指で叩いてみる。そうすれば不具合が直るかのようだった。再びスキャンしたが、またしても結果は無だった。目の前の人影は生きていないのか、それとも、スキャナーが壊れているのか。悪い方なら、スキャナーが正常ならば、近辺には他に生存者が誰もいないということになる。スキャナーが壊れていますように、と彼は祈った。その方が、もうひとつの考えよりも遥かに受け入れやすかった。

「すみません、あなたもスキャンしてみてください。」彼はグエンにスキャナーを渡した。

彼女はちらりと彼を見たが、意見をいわなかった。スキャンを走らせる。結果は同じく無だった。

「この装置によれば、近辺には誰もいないことになってる、ジャック。」彼女はいった。「彼が誰であれ、何か妨害フィールドを使っているに違いない、でしょ？いいたいのは、この方向には、何千人もの生命反応が無ければならないってこと。」

ジャックが返事をする間もなく、彼らの位置から15メートルあたりの地面に落雷した。雷の荒々しい鋭い音が、通りを揺るがす。ジャックは中断が入って良かったと思った。

男に、混沌の中心に向かって、ジャックは意味ありげに大股に進んでいった。頭上で、ヘリコプターの羽の特徴的な **ビシッビシッビシッ** という音と共に、空気がさざ波を立てた。グエンは頭上を見上げた。風雨が渦巻く嵐の雲以外、何も見えなかった。しかし、何か音が立てている。それが何にせよ、グエンには気に入らなかった。

道の真ん中で、男は腕を両脇に下ろし、ジャックに向かって歩き始めた。ふたりは昔のウエスタンのガンマンみたいに歩んでいった。男は同化したかのように、ジャックのあらゆる動きそっくりに動いた。男がジャックのわざとらしさまで真似たので、グエンは不安

になってきた。彼の顔は影になって見えず、近づくとつれて、ひとりの姿が二重に見えてきた。焦点がうまく合わず、亡霊のように輪郭がぼやけて、はっきりしないようだ。また**ビシッビシッビシッ**という音が聞こえた。

12メートルあたりまで近づいたとき、急にジャックが止まった。

相対する相手から影がゆっくりと広がってきて、ジャックの足元にじりじりと近づいてくる。左手で、浸食を続ける影が、フラットの建物全体を飲みこんでいく。しかし、ジャックはひるまなかつた。暗闇が玄関を這い上り、窓を黒く覆い、屋根に向かっていく。そして、影が全体を包んだとき、**ビシッビシッビシッ**という音が大きくなり、15階建ての建物が溶け始め、レンガのひとつひとつから中身がにじみ出て、全体が内側に陥没し、湯気の立つ汚泥になり果てた。その汚泥すらも溶け出して、地面に、地表に深く開いた亀裂に、吸い込まれていった。

グエンは恐怖に目を見開いた。頭に浮かんだのは、大きく口を開けた地殻に吸い込まれて、今や消えてなくなってしまった建物の中で寝ていた人間のことだった。灰色の泥が、元はテレビやコンピューターや家具や写真だったのだ。もうどれくらいの人間が、この犠牲になったのだろうか？グエンは無力さを感じた。存在しない相手と、どうやって戦えばよいのだ？みんなで影の中に飛び込むことしかできない。

そのとき、繋がらない携帯電話と留守録メッセージのことを思い出した。

リース。

彼女は目の前に大きく広がる無を見つめた。雨が降り注ぎ、彼女の頬を涙のごとく流れた。

「何者だ？」ジャックは生き物に挑戦状をたたきつけた。ここまで近づけば、人間ではないことがわかった。顔の無い人間なんぞ、会ったこともない。

答えが聞こえたというより、ジャックには感じた。店の正面のショウウィンドウのガラスや、道のアスファルト、建物のレンガ、空気のさざ波を通して感じた。通りが音を支え切れなくなり、音が形となって、何か切れたように、その名を告げる。

「ゴルディアン。」

ゴルディアン。終わりなきもの。

その瞬間、稲妻が走ってトラベラーに落ち、ジャックは対峙しているものの正体を知った。落雷の衝撃で、そいつの胸から股間に向けて体が裂けたが、切断されてもそいつは微動だにしなかった。深く開いた傷は、その影と・・・まったく何も無いのに、生きているものと・・・同じもので満たされていて、渦巻いていた。そいつはよろめきながら1歩前に出、生まれたばかりの宇宙のような漆黒が傷の中から溢れ出てきた。そして、漆黒が縮んで元のトラベラーになり、背筋を伸ばすと、背が伸びていた。

よろめき歩く無の存在の死霊ではなく、人間の理解を超えた何かだった。変わることなく群れながら、無限に動き続け、かろうじて人間の姿を保っている。果てしない存在。多

数から成る存在。生をはらみ、死にうづくもの。

未開の文化なら、そいつは悪魔と呼ばれたことだろう。しかし、ジャックはそいつの正体を知っていた。ゴルディアンの中に、数兆以上に上る数の魂が見えた。自己再生を繰り返すナノ分子ロボットが互いに引き寄せられ、永遠のゲシュタルト[※1]を構成している。生態破壊用に作られた戦争マシン。世界を食らう物。

ビシッビシッビシッという音が聞こえた瞬間に、その正体に気付くべきだった。それはナノロボットが空気を切りながら、繰り返し繰り返し、形を取り、再び形を取る、という終わりなき奮闘の音だった。すべてを食らい尽くし、後には何も残らない。以前、ジャックはその話を聞いたことがあった。もう今は無き世界のことを。

「グエン、イアント、SUVに戻れ！」ふたりが行ったかどうか、振り返って確かめるリスクは犯さなかった。ふたりを信じていた。一步後退した。「無線を使え。救急隊の周波を試すんだ。全員を可能な限り遠くまで逃がすように。任せろ。」

「いったい何をする気？」グエンは叫んだ。彼は微笑んだ。その微笑みが彼女に見えなくても、どうでもいいことだ・・・彼女のために微笑んでいる訳ではないのだから。もしも、彼女がその表情を見たとしたら、彼を置いてその場を離れようとはしなかっただろう、ということはおぼろげにわかっていた。彼女をよそにやったところで、せいぜい長くて2、3時間長生きできるだけにしか過ぎない。世界は、そのわずか2、3時間の差を必要としているのだろう。ジャックはわずかに肩をすくめたが、その仕草はコートの下に隠れて見えなかった。

「おれは世界を救う。おれしか適任者はいない。」

ゴルディアンの体内摂取網が広がっていく。ナノロボットは世界を食らい、それをエネルギーとして再生を繰り返していく。食べれば食べるほど、成長していく。その進行が、いまは緩慢になっていた。しかし、彼らが急激に増加することをジャックは知っていた。1兆の腹を空かせたナノロボットが、倍の2兆に。2兆が4兆に。4兆が8兆に。数時間でサウスコースト全体が影に覆われる。1日も経たないうちに、英国は消えてなくなる。いくばくもなく、東はプラハ、ウィーンが陥落し、西はブランズウィックから海を越えてボストンが陥落する。24時間以内に、世界はゴルディアンの影に包まれる。ナノロボットに髓まで食い込まれて、あらゆる生物がこの世から取り除かれていくのだ。すべてが消えて無くなると、次に食らう世界を見つけるまで、ゴルディアンは自分自身の「身」を自ら食らうのだ。

SUVのエンジンをふかす音が、次いで、ギアをバックに入れ、タイヤのこすれる甲高い音がジャックに聞こえた。ジャックは、通りで死とたったひとりきりになった。

いまや、本当に嘲笑していた・・・荒々しく。「さあ、かかって来い。ダンスの相手をしてやる。」彼はいった。

右手の向こう、ミレニアム・スタジアムが粉々に砕け落ちていく。

ジャックの後ろで、足音が聞こえた。ジャックは振り向かなかった。「おれは行けといっただはずだ。」彼はいった。

「あなたが死のうとしているのを承知で、ぼくが立ち去るとでも思ったのですか？」イアントは吐き捨てるようにいった。

「おれは死なない。」ジャックはいった。

「何事にも終わりがあります。で、今回のプランは？」

「あまり深くは考えてない。」ジャックはひた迫ってくるゴルディアンの影を見下ろした。もう3メートルに迫り、ゆっくりと近づいてくる。その下で、ナノロボットが進みながらアスファルトを食っているため、地面が泡を立てて溶けていく。

「どうせなら、計画は上手にシンプルで行きませんか？」

「おれはシンプルに賛成だ。」1歩、2歩と後じさりながら、ジャックはいった。

「結構です。逃げろ！」イアントはジャックの袖をつかみ、一緒にふたりはまっしぐらに通りを駆け抜け、商店街から住宅地に入った。雨のお陰で、走る足元が心もとない。そして、角を急角度で曲がったとき、イアントの足元が滑り、地面に倒れた。立ち上がろうとしたとき、雷の閃光が空を照らし、家の戸口に立つナイトガウンとスリッパ姿の女性が見えた。彼女はおびえる子供を腕に抱いていた。

「いったい何が起きているの？」ジャックが近づくと、彼女はおどおどとたずねた。「この子、灯りが無いと寝られないのよ。おまけにあの騒音……」

「名前は？」息をつきながら、ジャックはいった。

「シェーラ。」女性はいった。「この子は息子のトム。」

「ここにいてはいけない、シェーラ。逃げないと……」

トムは5歳か6歳くらいで、ずっと抱っこを続けるには大きすぎる。彼は身を振りほどくと、泣き始めた。

「止めて、この子、あなたにおびえてる。」シェーラはがみがみといった。ジャックが返事を返す間もなく、通りの向こうにまた落雷が発生した。

シェーラはショックを受け絶叫し、男の子がめくら滅法に走りだした。彼は落雷した方とは逆の、**ビシッビシッビシッ**という音に向かっていった。

「そっちはいけない！」立ちあがっていたイアントは、男の子がそれ以上行かないように抱き上げた。

母親が安堵の表情を見せたのもつかの間、またも絶叫を始めた。暗闇の中、彼女が目にしたものは、理解をはるかに超えるものだった。通りが文字通り消え去っていく。イアントの両側で、家が崩壊していき、**ビシッビシッビシッ**という音が激しくなっていく。イアントが重たいトムを何とか抱き上げて走り出そうとしたとき、暗闇が彼と少年に覆いかぶさってきた。

子供が絶叫した。

そして、イアントが絶叫した。

そして、ジャックとシェーラは走った。

緊急避難を告げるサイレンが恐怖と共に夜空に満ち、グエンは落胆を見せるまいと葛藤していた。まるで怯えきった牛の群れを移動させているような状況だった。みんな歩きたいのか、走りたいのか、単にその場へ倒れたいのか、お互いにくっつきたいのか、暗闇に飲まれるのを待っているのか、彼ら自身ですら理解できていない。

「進んで！」夜の闇の中を移動し、カーディフを離れる移住者達を、グエンは急ぎたてた。「後ろを見ないで。振り向かないで。丘の上を見て、そちらを目指して！」

何万という人々が列を成し、野原を横切っていく。状況判断はグエンに任せ、警察は群れを誘導する羊飼いに徹していた。何が起きているのか理解している者がいなかったから・・・実のところは。まるで、街中の人が夢から覚めるのを忘れてしまったままベッドから起きだして、よろめいているみたいだった。服を着替える時間もなく、シーツや部屋着に身を包み、悪夢の中を歩いていた。あるものはパジャマの上からジーンズを履き、あるものは素足のままだった。すべてがあまりにもあつという間に起こってしまったのだった。

いまや彼女はすべきことを、ただ行うのみだ。警察を全住民を奮い立たせ、大移動を率いながらも、彼女の頭の中は、ジャックとイアントが彼らだけ孤立し、モノと対峙するため、街に残ったのだ、という考えでいっぱいになった。

一度考え始めると、次の考えがわきあがってくる。リースはどうなった？彼ら全員が死んでしまったら、どうなる？

彼らに何かあれば彼女にはわかるはず、と思いたかった。彼らの間には絆があり、彼女には感じるのだと。しかし、実生活でそんなことはあり得ないとわかっていた。死を常に目撃し、目にする回数が増えるほど、鈍感になっていく。現実的になろう。もう何百回目かの、通信ヘッドセット呼び出しを試みる。信号は返らず、空電ノイズが聞こえるだけだった。彼女はその意味を考えまいとした。

「きっと大丈夫。」グエンは傍らの男性にうそをついた。彼は彼女の方を見て、微笑んだ。弱々しい打ちひしがれた微笑みだった。彼は彼女の言葉がうそだとわかっていた。好意的な自信に満ちた声で、元気づけてくれる言葉が欲しかっただけだった。小さな女の子が男性の右手を握っていた。彼女は声も無く涙を流し、ラゲディー・アンの人形を胸に握りしめていた。人形は戦争をくぐりぬけて来たかのように片目が無かった。きっと洗濯機か何かの中を何回もくぐりぬけてきたのだらう。

「お嬢ちゃん、お名前は？」グエンは女の子にたずねた。

「エリンよ。」彼女は鼻をすすりながらいった。涙と風にはためく彼女のナイトガウンのため、エリンは実際よりひ弱で繊細に見えた。

「あたしの友達がふたり、まだ街に残っているのよ、エリン。」女の子の手を握りながら、グエンはいった。「彼らがわたしたちを助けてくれる。約束する。」

「逃げろ！」ジャックは鋭く叫んだ。

その一言が、永遠に続くかのように聞こえた。

シェーラは手をジャックからもぎ離すと、振り返った。「トム！」

心臓が一打ちする瞬間・・・長く伸びていくようなわずか1秒の間・・・ゴルディアンが無慈悲に体内摂取していく **ビシッビシッビシッ** という音の下から、ジャックは少年の声が聞こえたように思った。しかし、すぐにナノボットが空の通りを埋め尽くす猛り狂った音に満たされてしまった。その騒音の向こうにも、下にも、裏にも、間にも、あるものといえば、崩壊と溶解のみだった。

ジャックはシェーラを連れて引きずって行こうとしたが、彼女は彼の横に膝をついて倒れてしまった。彼女のうめき声は痛ましかった。空虚に向かって息子の名を叫び続けた。ジャックは彼女を連れて4歩進んだが、彼も立ち止まって振り返った。

彼らが来た通りが消えていた。ゴミ箱、道路の白線、店のショーウインドウに看板。すべてが単に途絶えていた。ゴルディアンの飢えた影が排水溝をさざ波のごとく覆い、這い寄る黒い死が排水管を昇っていく。

ほんの一瞬前まで子供を抱えたイアントがそこにいた・・・しかし、たった一瞬で、すでに手遅れになっていた。降ってくる影がジャックに見えたが、もう何も打つ手が無かった。イアントは横向きに倒れ、それでもトムをしっかりと胸に抱きしめ、彼自身を盾にして暗闇から少年を守るかのように腕をまわしていた。

ジャックは暗闇が広がるのを成すすべもなく見つめた。あっという間にイアントの右足が消え、代わりに影がのたくり、群がった。そして、左足が消え、その下の地面も消えた・・・アスファルトが人の肉体と同じく、ただ簡単に無に変わってしまった。

最悪だった。黒い一筋の巻きひげが、死の一撃となってイアントの首から両目に向けて貫通した。ジャックはその目を見、哀れになって目を逸らせた。その目に恐怖と苦痛が宿っているのが見てとれたから。恐怖と苦痛は生を意味した。

いまや走って逃げる以外何もできないとわかっていた。シェーラを救い、世界を救う方法を探すのだ。ただ、いつもするように。しかし、シェーラはそんなこと、考えてもいなかった。イアントがいた場所を振り返り続けた。突然、彼は理由を悟った。

彼女の世界が消えてしまったのだ。

彼女にとって息子が人生のすべてだったなら、息子がいなくなってしまった今は何だというのだ？

ジャックは手を離し、彼女の好きにさせ、死に向かって歩き始めた。

「止める！」雨の中、大股で歩きながらわめいた。「おまえはゴルディアン、世界を貪り食う者。しかし、おまえももう終わりだ。」

顔に流れ落ちる雨に心は安らいだ。雨、崩壊する世界の中、唯一変わらない物。ゴルデ

ィアンは、ジャックを見るため、頭をもたげた。目の中を過ぎていく光が火花を発する・・・危険なパチパチと音を立てるエネルギー。そいつの周りでナノロボットが叫び声を上げ、合体して一つの声となった。

「おまえは、われらを、知って、いるの、か？」

「知っている。」

「しかし・・・おまえは、デア・デナイ・ゴルディアン、か？」

デナイ、でない、否定だ、否定だ・・・世界全てがその言葉をささやいているようだ。まるでジャックが勝者になるよう励ますかのように。

「あそこを見ろ、だろ？」モンスターのもの問いたげな闇から、わずか1メートルほどの位置に立ち、ジャックはいった。コートの前を開き、両手をズボンのポケットに突っ込んだ。小さな反抗も、高まる悲壮感を抑え込む足しにはならなかった。

「なぜだ？」ジャック自身の声が、聞こえるだけでなく、自身の体にも感じた。

「おまえは遙か昔、もう存在しない世界で人工的に作られた。」無に向かって叫んだ。「おまえが足を踏み入れた世界は、すべて滅びた！われ思う、故にわれあり。おまえは破壊するのみ、故におまえはありえない。おまえは創造しないし、宇宙に何も残さない。おまえはおれを殺せない。おまえは存在しないからだ。おまえは無だ。大きな無意味の無だ。」

ゴルディアンは、この予想もしない反乱を嘲笑い、そして暗闇そのものがさざ波を立てたようだった。こいつは怒っているのか？この小さな人間の猛攻撃に興味をそそられているのか？相手の神経に触ることができたのだろうか、それとも、ゴルディアンには触る神経すら無いのだろうか、とジャックは不思議に思った。

「われらは・・・すべてに、なる。」

挑戦的な、何となく悲劇的な声だ。暗闇が激しく揺れ動き、渦巻きながらジャックの足元10センチ辺りまで来たが、凄まじい波は覆いかぶさっては来なかった。遠い昔、ゴルディアンはマシンだった。限りなき放浪を続け、こいつは疑うという能力を身に付けたのだろうか？ジャックは一步前に出、闇に近づけるだけ近づいた。

「こんなことをする必要は無い。」前よりも優しくジャックはいった。「あらゆる奇跡を打ち砕きながら、世界から世界へ渡り歩く必要は無い。放浪者となる意味合いは、十分にわかっている・・・永遠に生き、訪れるのは死ばかり。おれたちは、おまえとおれは、似た者同士だ。おまえは孤独である必要が無い。」

「われらは、ゴルディアン、だ。」

「わかっている。おまえのことは誰よりもわかっている。」

「おまえは、ゴルディアン、では、ない。」

「そうだ。おれは、キャプテン・ジャック・ハークネスだ。」

「なんで、そんなところに突っ立って、話しかけてるのよ？」

シェーラは、成すすべもなくジャックの背中を拳で殴り、金切り声で叫んだ。彼女がい

ることをすっかり忘れていた。彼女が怒りを雨あられのごとく浴びせかけたので、もう少しでゴルディアンの闇によるめいて入ってしまいそうになった。何とかバランスを取ると、暗闇の淵でぐらつきながらも、彼女の方に向き直った。

「なんで、こんなこと？」涙にむせびながら、彼女は怒鳴った。「こんなこと止めさせて！息子を、返させて！」声が割れて、途切れた。ジャックは彼女を固く抱きしめ、ささやいた。

「シェーラ、おれを信じて下さい。出来る限り速く走って逃げるんだ。おれはこいつと話さねばならない。こいつは状況を理解していると思う。こいつは不幸だと思う。」

彼女は身を振りほどき、荒い息をしながら、理解できないという嫌悪感に満ちた目で彼を見つめた。

「不幸ですって？」彼女はささやいた。

「こいつは戦争装置として、別世界で製作された。」ジャックは説明しようとした。「ミダス王が手で触れたものをすべて変えてしまったように、呪われている。その様に進化してしまったことに気付いたとき、**どんな気持ち**になるか想像してくれ。」

信じられ無さに首を振りながら、シェーラは後ずさった。彼女は理解していないということがジャックにはわかったが、彼女は理解する必要もないこともわかっていた。彼女が怒りのあまり彼を置いて逃げてくれれば、生き残れるチャンスはまだある。

しかし、彼女は逃げなかった。彼女は走り始めた。

彼女はジャックの不意を突き、全速力で体当たりした。彼は機敏にかかとでぐるりと回り、留まったが、叫びながら通り過ぎるシェーラを捕まえることはできなかった。彼女はつば広帽の男に向かって襲いかかった。

彼女には倒れる時間すらなかった。

ナノボットは彼女の足から仕事を始め、彼女は足元からくずおれた。しかし、彼女の体は地面に触れる間もなく、ナノボットによって無になっていた。ナノボットはむさぼるように彼女を喰いつくし、暗闇の群れの中に戻って行った。

ゴルディアンは、平然と彼女の死を見つめていた。

「こんなこと、する必要は無い！」ジャックは夜の闇の中、わめいた。「他の方法だってある！」

「ありえ、ない。」ゴルディアンは単調に唱えた。「それは、われらの、本質では、ない。」

「おれなら助けられる！」

ゴルディアンは、両腕を大きく伸ばした。稲妻がフォークのように枝分かれしながら、ギザギザと天から降ってきて、永遠のゲシュタルト[※1]の胴を槍のように貫き抜けていく。そいつが頭をのけぞらせ、急増した電圧を賞味すると、見る間に背が30センチ伸びて、ジャックを威圧した。

「助ける、など、ありえ、ない。」

言葉が言い訳のように響いた。少なくとも、ジャックはそのように解釈した。心が活発

に働いた。取るべき行動は、たったひとつだけ。もし、ゴルディアンを時空間の裂け目に帰してしまったら、他の世界をどん底に落とすことになる。ゴルディアンは、止まらない。ジャックは、止まらない。この宇宙の中、不死で孤独なふたりが最後に残るまで、何兆もが死ぬだろう。

その瞬間だった。ジャックに戦争マシンの本質が見えた。ゴルディアンを見たとき、彼自身が見えた。無敵の戦士ではなく、永遠の罰を宣告された放浪者・・・永遠に死の中を歩み続けるという呪いを受けた者。彼には何をすべきかわかっていた。

闇の中、前に進み出ていった。

街の郊外の広野に、空気をつんざいて地球のものとは思えない叫びが響き、グエンは素早く振り返った。遠方から、丘の向こうからこだまのように聞こえたにも関わらず、すぐ傍からのように聞こえ、街を捨ててやってきた人々の背筋をぞっとさせた。それがジャックの声で、いつもと違う甲高い雑音のようなエイリアンっぽい声で聞こえているのだということに気付いたグエンは、血が凍るような気分だった。

彼女たちがやってきた方を振り返ると、小さな街の中心に・・・少なくとも街があった場所の中心に向かって、一定間隔で落雷が発生しているのが見えた。遠く離れたここからでは、何が起きているのかははっきりしないが、彼女は何かとても悪いことだという重い気分になった。たぶん、普通の方法でジャックが死ぬことは無いが、一瞬でズタズタに引き裂かれ、分子まで一個ずつばらばらになったらどうなる？

「みんな、立ち止まらないで！」彼女は人々に叫んだ。「何が起ころうとも、一緒に行動するのよ！」

ジャックはズタズタに引き裂かれていた。ゴルディアンの世界に踏み込むと、計画も何もなかったものではないとわかったが、にもかかわらず、それが計画だった。街の残りが食い尽くされるよりも長く、彼の細胞の再生が持ちこたえるかどうかは定かではなかったが、試すだけの価値はあった。

「かかって来い！」嘔みしめた歯の間から怒鳴った。「おれを喰え！この体なら、おまえは永遠に食べていける！」そうなるかどうか、彼自身にもわからなかった。

「われらは、すべてを、食べられる、のに、なぜ、ひとつを、食べるの、か？」

「おれと一緒になれ、もう二度と孤独になることはない！」小川のように体に流れ込んでくる苦痛に、ジャックは意識を失うまいと格闘した。もう、脚の感覚が無く、心臓が一打ちする間にもナノボットが両腕に群がり喰い込んでいった。目の前で、指が分解していき、両手が食いちぎられて粉々になっていく。

「おれは・・・おまえの・・・宇宙・・・そのものに・・・なる・・・」元、脚があった空間に、苦痛のあまり二つ折れにかがみこみながら、ジャックはあえいだ。

「おまえは、無に、なる。」ゴルディアン自身がジャックの中に流れ込み、ナノボットが

震えた。

「おれは、すべておまえのものだ。」ナノボットが顔に、肺の奥深くにまで流れこむまで、彼は持ちこたえた。凄まじい苦痛だった。全身の細胞が死の悲鳴を上げた。

ゴルディアンは生き物が降伏したのを感じ、ご馳走が感じている苦しみにぞくぞくした。いままで経験したことのないような肉、骨、骨髄を味わった。この肉は癖になる。この肉は逆らっている。ゴルディアンは、存在するようになって初めて、死以外の何かを味わった。それは生きているものの味だった。

そして、その味は苦痛だった。

「おまえは、何者だ？」

空虚の中に声が存在した。空虚だった。すべてが空虚だった。

「おれはゴルディアンではない。」

ジャックは自分の声が聞こえたことに驚き、また、まだ考えることができることに気付いて驚いた。何も感じず、肉体の感覚は無いが、ここに、その存在が何であれ、存在していた。

「そうだ。おまえは、ゴルディアン、では、ない。」返事を感じた。「おまえは、何か、別の、もの。どうやって、いままで・・・耐えてきた？」

「信じてほしい。おれには選択権が無かった。」

「われらにも、なかった。」悲しみに沈んだ答えが返ってきた。

「おれはどこにいるのだ？」ジャックはたずねた。「街はどうなった？」

「街など、どうでも、よい。」ゴルディアンは単調に唱えた。「われらは、**おまえを**、永遠に、食り、喰う。」

「おれはどこにいるのだ？」ジャックは繰り返した。

「おまえは、われらに、宿っている。」ゴルディアンはいった。「われらが、おまえに、宿っている、ように。われらが、食べ、尽くす、より、速く、おまえの、体は、復元、されて、いく、のを、感じる。ナノボットは、おまえの、血を、骨を、味わっている、しかし、おまえの、存在、としての、全、性質が、われらの、挑戦に、立ち向かって、いる。われらは、永遠に、融合、するの、だ。」

「いふなれば、ウロボロスだな。」ジャックはいった。「おまえは、古い引喩のかたまりなのか？」

「われらは、ゴルディアン、だ。」

ジャックは笑いに近い何かを見せた。

「もう、そうだという確信は無いな。」

「どういう、意味、だ？」

「おまえ自身がいったことだ。おれたちは永遠に融合した。おまえは、もう、ゴルディアンでは無い。おれたちは、何か新しいものだ。おれたちの、双方が、だ。そして、おれ

私たちは一緒に、おまえが与えてきた害を、直していくのだ。おれには、おまえが破壊してきた物の構造を感じ取ることができる。おれたち双方を通して、データとしてたどることができる。再建していこう。一緒に。」

「できない！」ゴルディアンは甲高い声でいい、何兆という微細なかぎづめが骨をカタカタと鳴らし、ジャックの意識の周りで共鳴した。

「それらは、われらの、もの。おまえは、われらの、もの。この、世界。すべての、世界。すべては、われらに、属す。**われらは**、ゴルディアン、だ！われらは、おまえを、永遠に、貪り、喰い、尽くすの、だ！」

ゴルディアンは、ただひとり、通りに立ちつくした。それとも、それはジャックか？どちらともいえなかった。ひとつの体が痙攣し、よじれ、形造られ、再度形造りなおされ、表情に怒りと苦痛が現れたかと思えば、また消えていく。一瞬、そいつはゴルディアンの広つばの帽子をかぶって見えた。次の瞬間、ジャックの眼の輝きがやどり、混沌の中にコートがはためいてみえた。その生き物自身が戦争そのものだった。

「おまえに、勝ち目は、ない。われらは、ゴルディアン、だ！」ゴルディアンの声だったが、その言葉はジャックの口から洩れていた。腹をすかせたナノボットが混沌とした形に群がっているため、その姿はかすんで見え、無慈悲な**ビシッビシッビシッ**という音が激しさを増し、甲高くなっていく。まるで、塊が臨界点に達しているかのようだった。

「われらは、ゴルディアン、だ！われらは、ゴルディアン、だ！われらは、ゴルディアン、だ！われらは・・・」

ナノボットは繰り返し繰り返し、彼ら自身をががつと食べた。しかし、この奇跡的な男を脳幹まで食い尽くしても、腕や胸の分子が編みなおされて、ナノボットの周りで再度形作られてしまう。さらに多くのナノボットが生まれ変わった心臓を貪り尽くそうと群がり、再構成された肋骨や、不滅の体の中に送り出されて活性化させる血を、激しく打ち破り続けた。しかし、どれほど速く貪り喰っても、それ以上の速さで肉体自身が修理されていった。

初め、ナノボットが原因でそいつが感じている苦痛を、ゴルディアンはゆっくりと味わっていた。小さな世界食らい達が総掛かりで、この小さな男に食い込んでいく体験、この新しい刺激を食らった。いまや、この苦痛に終わりが無いのは明確だった。そして、快い刺激はフラストレーションとパニックになった。ゴルディアンの無限の広がり、肉体という檻に焦点を合わせ、突如、恐怖が何たるかを知った。

「おまえ、われらに、何を、した？」そいつは夜の闇の中、わめいた。「われらは、ゴルディアン、だ！われらは、ゴルディアン、だ！われらは、ゴルディアン、だ！われらは・・・」

「われらは、新しい。」

ゴルディアンは、自分が何になってしまったのかじっくり考えた。恐怖、挫折、苦痛。

生命。コア・プログラムにとって、これらはすべて新しい体験だった。認識という概念が発達するまで、長い時間を要した。しかし、そのことをあまり認識できてはいなかった。ゴルディアンは、死そのものの存在を認知していたが、いまや死をどのように感じるかを認識した。

この官能的な誘惑から逃れることができれば、元に戻ることもできるかもしれない。しかし、もう脱出口が無いとわかっていた。本当に逃げ出したいのだろうか？ジャック無しでは、絶望的な孤独に見舞われることもわかっていた。

「われらは、何者、だ？」そいつは、自分自身を探り、元ジャックだった部分から答えが返ってきた。

「われらは、キャプテン・ジャック・ゴルディアン、だ。」

「それは、どういう、意味、か？」

「周りを、見て、みろ。」そいつは自分自身にいった。

キャプテン・ジャック・ゴルディアンは、苦痛を簡単に感じとれた。頭の中の大勢の状態が消え、体からもその状態が消えた。突然、肉体の感覚が認識されて、ジャックの目を通して見ていた。

その姿からあふれ出たナノボットが、いたるところにいた。通りに、そのまた向こうの通りに、建物の中にも、人の中にも、そして、**命の中**にも。その放射状に広がる存在は、ゴルディアンともジャックとも認識できるものだった。もはや、動揺は無く、エネルギーにあふれて生き生きとしていた。

融合した姿が、手の指を大きく開いた。指から指へと火花が散り、荒れ狂う嵐の雨の中で、シューシューと音をたてた。そいつが空を見上げると、スクールがゆっくりとおさまっていく。そして、そいつは足元を見下ろした。

そいつはひざまずき、イアントの砕けて折れた手を取ると、唇に引き寄せた。そいつが肌にキスをする、その身が再生した。ジャックは恋人の命を救えなかったことを嘆き、ゴルディアンは自分をもたらしてきた被害を悔いた。

そいつは、修繕が必要だとわかっていた。心の中で、そして、何億何兆ものナノボットの中で、ひとつの言葉が高鳴った。

「**治せ。**」

言葉を聞いたかのように、新しい生き物の腕の中で、イアントは痙攣し、命が流れ込んでいく。彼は頭を激しくのけぞらせ、純粋で完璧な恐怖に絶叫した。命を与えるキスで、あまりにもすぐに生き返ったために、全身すべての皮がむけた状態だった。光が胸から尻に向かって広がって、彼の体の組織を、次いで、欠点ひとつないスーツも編み直していく。まるで天の機織り機のように、前へ後へ右へ左へと命の縦糸と横糸を編みあげていく。

「おれの、もとへ、戻って、こい！」キャプテン・ジャック・ゴルディアンは、命の再現に興奮し夢中になった。無から何かを形作るのが、気持ち良かった。何か愛せるものを。

「おれの、もとへ、戻って、こい！」そいつは、その本質の持つふたつの面を調和させ

つつ、よりジャック寄りの容貌を取りながら、ジャックの声でもう一度命じた。

痛みが治まっても、イアントは激しく身をよじり、もう影は消えてしまったにもかかわらず、体はまだ影から逃れようとしていた。死の恐怖と、新しい命の混乱の中、自分を抱きしめているジャックにそっくりな何かがイアントの目に入り、その限りなく年老いた目に宿る悲しみと喜びが見えた。

イアントは力を抜き、深呼吸し、しゃべろうとした。しかし、言葉が出る前に、急にナノロボットが彼の体から金色の光の球となって飛び出し、彼の目の前で命の息吹が再作成され始めた。

「ママ？」創造の炉の中から、子供の声がした。「ママ？」

トムだった。少年はイアントの腕をすり抜け、ほんの少し離れた場所に立ちつくす母親の元へと走って行った。彼らの周りではすべてが輝き、街が数センチずつ次々と再生していく。

「終わったのですか？」イアントはキャプテン・ジャック・ゴルディアンを見上げた。「あなたに何が起こったのですか？みなはどうなったのですか？」

「もうすぐ終わる。」聞きなれた訛りの声があった。「しかし、おれは違う。」この新しい姿で時空間の裂け目を抜け、ゴルディアンが消した無数の世界を再生し終えるまで、彼には終わりが来ないとわかっていた。ゴルディアンはそれらすべての世界を事細かに記憶しており、ジャックのあり余る命がナノロボットの中を駆け抜けて、一緒に働くことですべての世界を再生できるのだった。

イアントはベイ地区に立ち、ゴルディアンがこの世界に入ってきた時空間の裂け目の口をスキャンし探した。裂け目は見つかり、まだ口が開いていて、吹き荒れる嵐で保たれていることがわかった。

「彼をぼくたちから取り上げないでくれ。」彼はキャプテン・ジャック・ゴルディアンにいった。「ぼくが許さない。」

ジャックにそっくりな男は、ゴルディアンに・・・ジャック自身に・・・何が起こったのかを説明したが、イアントは受け入れなかった。もし、この生き物が食らったものを何でも再生できるのなら、なぜジャックは再生できないのだ？

「シンプルではないからだ、イアント。」生き物は説明した。「ジャックはゴルディアンと結合し、ゴルディアンもジャックと結合している。ジャック無しでは、ゴルディアンが破壊を続けてしまう。」

「本当にそうでしょうか？」イアントは訴えた。ほとんど涙声だった。「ゴルディアンがあなたの・・・つまり、ジャックの人と成りを知った後も、変わらないとは思えません。ジャックを知ることで、あなたは変わります。彼は過去のあなたを、より良いようにします。彼はそうすると、ぼくは思ってます。彼はみんなを助けたのです。」

「われは、孤独に、なりたく、ない。」ゴルディアンの声が恋人の口からもれた。

「ぼくも孤独になりたくない。」イアントはいった。「あなたには、これから出会う世界があるじゃないですか。」

キャプテン・ジャック・ゴルディアンは、時空間の裂け目をのぞき、その新しい意見を考えた。奪い取ったもの以上のものを、返してやることができるかもしれない。そして、彼は真の創造主となるのだ。彼はジャックをメモリーから引き出すと、手のひらに電流を躍らせた。彼がそれに命の息吹を与えると、光が紡ぎあげられ、激しいダンスを踊りながらよじれて上へ外へと渦巻いた。

最初、光の中に暗闇だけが存在した。しかし、より輝きを増し、高々と燃え上がると、そいつ自身が一番最近に知った見慣れた姿となった。影は男の姿になり、その男はキャプテン・ジャック・ハークネスだった。

イアントはジャックをじっと見、それからゴルディアンを見て確認を求めた。ゴルディアンは、まだジャックそっくりの姿だった。

「彼だ。」生き物は宣言した。

「あなたは？」イアントはたずねた。

「われも、彼の、姿を、保って、いる。」ゴルディアンはいった。「元の、姿の、模倣は、われと、留まる。」

ゴルディアンはジャックを見、命が溢れているのを感じた。彼が創造したものは、彼自身そっくりに見え、この顔を彼自身のものにするのは間違っているとわかった。彼自身の姿に手を入れて、昔の顔に外見を変えた。ただし、影のマスクを身につける代わりに、ゴルディアンはいまや光をまとっていた。

ジャックはすべてを覚えていた。ゴルディアンの新しい顔をのぞきこむと、ジャックの面影が見えた。

「行け、おまえの真の姿を宇宙に知らしめるのだ。」彼はいった。「無から創造せよ。」

ゴルディアンはうなずくと、時空間の裂け目に向かった。街中からナノボットがより大きなかたまりとなって裂け目へ戻り、真新しい目的を携えて出発した。

ビシッビシッビシッという音がゆっくりと消えて、どこか遠くから教会の鐘の音が響いた。街中の灯りが点り、輝いた。

丘の上にいるグエンに、教会の鐘の音が聞こえた。灯りがひとつ、またひとつと戻ってくるのが見えた。彼女が見ている間にも、嵐が消え去って行く。見下ろしている街に誰か生き残っているのかどうか、知る由もなかった。一瞬、街全体が燃えているかのように見えたが、すべてが再び真っ暗になった。グエンは暗闇を怖いと思ったことは無かった。

この瞬間までは。

朝日が顔を見せるまで、まだ1時間以上ある。もし、朝が再び来るのであればだが。

彼女は待って、待って、ひっきりなしに携帯電話の電波を捕らえようと試し続けた。しかし、圏外のみままで、何度やっても無駄だった。

グエンは膝を立てて座り、膝に腕をまわした。もう、誰も逃げる気配は無かった。その代わり、みな、ただ日の出を待った。

時間が永遠に感じたころ、空との境目に、朝日の一筋の輝きが走った。

その一瞬のち、彼女が付けているブルートゥースのイヤピースが音を立てて息を吹き返し、ジャックがたずねた。「日の出の様子はどうだ？ ゴージャスか？」

「美しい！」彼女はいった。心からそういった。

Torchwood: Gordian

訳注

※1：ゲシュタルト：**gestalt**。それ自体が要素の総和以上のまとまりであるもの。

Notice 2009/12/19

このドキュメントは、Kubo Sachie が個人の楽しみとして作成したものです。

元の著作物の著作権を侵害する意図はありません。

また、日本語作成時の誤訳・文章脱落等は十二分にあります。訳の正確さを保証するものではありません。英語ではなく、日本語で読んで楽しんでもらえたら、と思います。

なお、物語の中の出来事、人物はすべて架空であり、現実との類似は偶然です。(あったら怖いかも・・・)

参考：使用した原文の出典

TORCHWOOD THE OFFICIAL MAGAGINE

Published by Titan Books

Issue 14, 15 :February, April 2009

'Gordian' by Steve Savile